床の上の住所

オリジナル単発ドラマ

脚本全文 制作記録 参考資料 独自性の確認結果

2026 年 10 月 13 日 完成稿

脚本 ChatGPT

全 26 場 想定約 35〜40 分

引っ越し前日。倉庫の床に描かれた新居で、母娘は家具の置き場所を確かめる。母の裁断台を動かすたびに、二人が言わずに済ませてきた暮らしの条件が見えてくる。

本書の前半に脚本全文、後半に制作記録と出典を収録しています。

登場人物と舞台

倉持奈緒（41）　引越し会社の見積・配車担当。説明が速く、聞き返す隙を与えずに仕事を進めてしまう。今回は自分の作った搬入計画を担当する。

谷口澄江（67）　洋服の寸法直しをしている。店舗を閉め、仕事を減らして娘と同居する予定。何でも「ついで」に引き受け、後で一人で苦労する。

谷口理佳（36）　澄江の娘。製品の取扱説明書を校正する仕事をしている。手動車椅子を使い、一人暮らしをしてきた。母の説明を先回りしてまとめる癖がある。

小野航（25）　引越し作業員。午後は別の現場に出る。奈緒より口数は少ないが、聞いたことと推測したことを分けて話す。

早瀬和夫（54）　営業所長。時間と費用の判断をする。長い説教はしない。

声のみ　澄江の仕事の依頼主／中古家具店の担当者

舞台

現代。地方都市にある架空の引越し会社「丸瀬運送」の営業所と、その翌日の新居。

登場人物、会社、契約条件、料金は創作。実在の会社のサービスや相場を示すものではない。

倉庫の一角は荷扱い研修用の区画。車両の動線から分離され、平坦な床と休憩設備がある。顧客の希望で家具配置の実寸確認にも使う。

澄江と理佳は、翌日、別々の現住所から契約済みの２ＤＫへ引っ越す。新居の出入口・水回りは理佳が現地で確認済み。本日の目的は、家具を置いた後の動線を確かめること。

表記

柱にある時刻は劇中の時刻。台詞のない動作も省略せず演じる。

床の線は作業用の目印であり、登場人物は実物の壁があるものとして検証する。検証をやめれば線を横切れる。その使い分けを明確にする。

車椅子の操作は理佳役の俳優の動作に合わせて調整し、無理な接触や転倒を見せ場にしない。

脚本全文

01　丸瀬運送・研修区画　午前九時十分

　　青いテープが、灰色の床をまっすぐ延びる。

　　奈緒が膝をつき、端を切る。

　　航は巻尺の端を押さえている。

　　床には二つの部屋と台所の輪郭。ドアの開く範囲は黄色。家具の大きさは、平らにした段ボールで表してある。

　　奈緒、最後の段ボールを置く。

奈緒「冷蔵庫。食器棚。食卓。これで全部」

航「人は、どこですか」

奈緒「これから来る」

航「じゃなくて。椅子、引いたとき」

　　奈緒、食卓の横の椅子を引く。

　　背が冷蔵庫の段ボールに重なる。

　　黙って少し戻す。

航「戻すんですか」

奈緒「座る人にやってもらう」

　　航、うなずく。折り畳み椅子を二脚置き、一本の脚が青い線を踏んでいることに気づいて直す。

　　奥には、毛布を掛けた大きな裁断台。

　　下げ札に「谷口様　査定待ち　持出不可」。

　　奈緒のスマートフォンが鳴る。

奈緒「はい、倉持です。ええ、今日は最終確認だけですから。十一時半には終わります」

　　奈緒、青い線をまたいで電話に出る。

　　タイトル『床の上の住所』。

02　同・受付から研修区画　午前九時二十分

　　理佳が自分で車椅子を進めてくる。膝の上には仕事用の鞄。

　　澄江は大きな布袋と、水筒を二本持っている。

澄江「お昼、要るかと思って」

理佳「午前中で終わるって」

澄江「終わったら食べればいいじゃない」

　　澄江が布袋を理佳の膝へ置こうとする。

理佳「それ、そっちで持ってて。パソコン入ってる」

澄江「あ、そう」

　　奈緒が出迎える。

奈緒「おはようございます。新居、実寸で描いてあります。壁は青、扉は黄色です。今日は家具を置いた後の確認を――」

澄江「あった」

　澄江は毛布の裁断台を見つけ、そちらへ行く。

　台の端を持ち上げるのではなく、毛布の端をめくる。黒ずんだ木の天板。

澄江「この角、ぶつけてませんね」

航「預かったときの写真、あります」

澄江「大丈夫。これは前から」

　爪の先で、小さな欠けをなぞる。

　奈緒、書類を理佳へ渡す。

奈緒「お荷物の最終一覧です。お母様の分と理佳様の分、色を分けました」

理佳「はい」

　理佳は読む。澄江の目は台から離れない。

03　同・床の新居　午前九時三十分

　奈緒が間取りを説明する。

奈緒「こちらが澄江様のお部屋。奥が理佳様。寝室とお仕事の机を兼ねる形です。台所から各お部屋までは、この通路を空けます」

澄江「奥の方が静かだものね」

理佳「声、入るから。仕事の通話」

奈緒「では、食卓をこちらに」

　奈緒は小さな長方形の段ボールを指す。

澄江「その台、そんなに小さくないですよ」

奈緒「これは理佳様がお使いの食卓です」

澄江「ああ。じゃあ、うちのは？」

　奈緒、奥の裁断台を見る。

奈緒「裁断台は、買取の査定をご希望ということで」

澄江「値段を聞くだけでしょ」

理佳「入らなかったら、売ってもいいって」

澄江「入らなかったら、ね」

　理佳が一覧をめくる。

理佳「載ってない」

奈緒「新居への搬入からは外してあります」

澄江「それで全部入りますって言ったの？」

　奈緒、すぐには答えない。

　青い線の外で、航が毛布を畳んでいる手を止める。

04　同・事務机　午前九時四十分

奈緒、見積時のメモを開く。

「大きいものは持っていかない。母了承」

続いて、別紙の預かり票。「裁断台　査定のみ。売却は所有者の返答後」

奈緒「電話で理佳様から伺って、私が搬入対象外と記入しています」

澄江「大きいものって、洋服だんすの話」

理佳「たんすと、この台の話もしたよ。お店、閉めるからって」

澄江「店は閉める。仕事を全部やめるとは言ってない」

理佳「そういう言い方だった？」

澄江「そういうつもりだった」

奈緒、二人の間に差し出しかけたペンを引く。

奈緒「台について、澄江様に直接、確認していませんでした。別の預かり票には査定のみとあります。こちらの確認漏れです」

理佳「私も、終わったつもりになってたから」

奈緒「一覧は作り直します。勝手に持ち出すことはありません」

澄江「なら、置いてみましょう」

澄江は、もう立っている。

05　同・床の新居　午前十時

奈緒と航が、裁断台を毛布と台車で運ぶ。

安全な位置で下ろす。台車を抜き、脚のがたつきを確かめる。

幅百八十センチ、奥行き九十センチ、高さ八十六センチ。

台所の中央を、大きな木の面が占める。

澄江「ほら」

澄江が台の角を軽く叩く。

奈緒は巻尺を伸ばす。

奈緒「ここに置くと、食器棚との間が六十二センチです」

理佳「そこは通らないでおく」

奈緒「反対側から、お部屋へ行ってみてもらえますか」

理佳が進む。

曲がる手前で止まり、小さく切り返す。

足元の出る部分が、部屋の青い線にかかる。

理佳、戻る。

理佳「壁、蹴るね」

澄江「もう少しこっちへ」

台を動かす。今度は冷蔵庫の扉が開く範囲に入る。

航が冷蔵庫の代わりの段ボールを扉の形に開いて示す。

航「飲み物、取れません」

澄江「私が取れば」

　理佳、何か言いかけてやめる。

奈緒「九十度、回してみます」

　台を回す。奈緒も航も息を整えてから下ろす。

　理佳は通路を抜け、部屋の中へ入れる。

澄江「通れた」

　理佳は振り返らない。

理佳「閉めるとこ、やっていい？」

06　同　続き

　航が扉と同じ幅の軽い段ボール板を持つ。

　奈緒が実測した蝶番側の位置を示す。

　重さや取っ手の操作感は再現できない。扉が動く範囲だけを確認する。

　理佳は、開いた扉の向こう側へ手を伸ばせる位置に車椅子を置こうとする。

　裁断台が、その切り返しを妨げる。

澄江「開けておけば？」

理佳「通話してるときは閉めたい」

澄江「そのとき、私が閉めてあげる」

　理佳、手を膝へ戻す。

理佳「仕事終わったら？」

澄江「開ける」

理佳「お母さん、出かけてたら？」

澄江「仕事の時間には――」

　澄江、言葉を切る。

奈緒「この配置は、なしにしましょう」

　奈緒、紙の図面に小さく斜線を引く。

　澄江は台を見たまま、うなずかない。

07　同　午前十時三十分

　裁断台の端に理佳が寄る。

　膝の前に、台の脚をつなぐ横木が来る。十分に近づけない。

　澄江が、台の上へ弁当包みを置く。

澄江「ご飯も、ここで食べれば。小さい方のテーブル、なくせる」

理佳「高い」

澄江「台所の椅子は、高いの売ってるでしょ」

　言ってから、澄江は理佳を見る。

澄江「あ、ごめん」

理佳「うん」

　澄江が弁当を下ろす。

　奈緒、台の下をのぞく。

奈緒「脚を短くする方法は――」

航「僕らでは判断できないです。この横木もありますし」

澄江「低くしたら裁断できない。腰、折ってやることになるから」

　奈緒は立つ。

理佳「食卓じゃないんだね」

澄江「ずっとそう言ってる」

理佳「うん。今、分かった」

　奥で事務所のプリンターが動き始める。

　誰も、次の配置を言い出さない。

08　同・研修区画の外　午前十時四十五分

　澄江の携帯が鳴る。

　澄江、布袋から眼鏡と糸巻きを出し、やっと携帯を見つける。

澄江「はい、谷口です。あ、どうも。お渡し、二十八日でしたね」

依頼主の声「追加で二着お願いできません？　皆、同じところで頼みたいって」

澄江「二着。丈は同じ？」

依頼主の声「そこ、もう一度見てもらった方が」

澄江「じゃあ明後日――」

　澄江、床の新居を見る。

　裁断台の周囲で、奈緒と航が図面を見ている。

澄江「明後日は、ちょっと。今日中にお電話します。ええ、今、外なので」

　電話を切る。

　理佳は離れた事務机でパソコンを開いている。

　画面に「操作を終了してから、電源を切ってください」。

　理佳、「終了してから」の文字を選択し、コメントを入れる。

　スマートフォンに、澄江からメッセージ。

　「あと二着だけ増えるかも」

　理佳は澄江を見る。声が届く距離。

　澄江は携帯を布袋へしまっている。

09　同・床の新居　午前十一時十五分

　裁断台は、澄江の部屋を表す青線の中に移った。

　ベッドの段ボール。低い収納棚の段ボール。

澄江は台とベッドの間へ横向きに入る。

澄江「ここは、私しか使わないから」

布袋から、補正中のワンピースを出す。

台に広げ、端を合わせる。

反対側へ行こうとして、ベッドの段ボールを踏む。

足を引く。

台を回り込むには、いったん部屋から出る必要がある。

澄江、それでも外へ回ってみる。

理佳「ベッド、片づけようとか言わないでね」

澄江「まだ言ってない」

理佳「布団、毎日上げ下ろしするの？」

澄江「まだ言ってないって」

澄江、裾を押さえる。向こう側に手が届かない。

奈緒「大きな布を使う仕事だけ、別の場所でというのは」

澄江「前に一緒に店やってた人のところ、借りたことはある。でも向こうも仕事してるから。来月ずっと空いてるわけじゃない」

理佳「だったら台は、一回──」

澄江「売る？」

理佳「まだ最後まで言ってない」

澄江はワンピースを畳む。三つ折りにしかけ、折り目がつくのを嫌って、また広げる。

奈緒の携帯に、十一時半の予定通知。

奈緒、消す。

10　同・営業所長席　午前十一時三十分

早瀬の机。配車表には予定が隙間なく並ぶ。

早瀬「小野は十二時十分に出す。午後の人、待ってる」

奈緒「分かってます」

早瀬「終わる？」

奈緒「台の配置だけなら」

早瀬「終わるか、聞いてる」

奈緒、図面を机に置く。

奈緒「私が台を外して計画しました。お客様の確認が済んでいませんでした」

早瀬「預かり票は」

奈緒「査定だけです。そっちは正しいです」

早瀬「じゃあ、間違えた計画の確認に来てもらったわけだ」

奈緒「はい」

早瀬は配車表に目を戻す。

早瀬「追加の確認料は取らない。小野が出たら、台を動かすときは俺を呼んで。重いものを一人でやらないで」

奈緒「ありがとうございます」

早瀬「お礼より、今日のうちに明日の積み順」

　早瀬、午後の予定表を奈緒へ向ける。

早瀬「三時半から次の人が使う。ここはそこまで」

11　同・休憩机　正午

　澄江の弁当が三つ並ぶ。

奈緒「私の分まで」

澄江「一人で担当って聞いたから」

　航が通りかかる。澄江、弁当の数を見て困る。

航「僕、持ってます」

　自分の保冷袋を上げる。

澄江「卵だけでも」

航「大丈夫です。次、運転なんで、いつも同じ量にしてて」

澄江「そうなの」

　航は手を洗いに行く。

　理佳は自分の弁当の蓋を開ける。煮物、卵焼き、白いご飯。

理佳「まだ甘いんだ」

澄江「卵？」

理佳「うん」

澄江「前は好きだったじゃない」

理佳「今も好き。最近、自分じゃ塩しか入れないから」

　澄江、少し食べる。

澄江「この台ね、最初、十二回払いで買ったの」

　奈緒が裁断台の方を見る。

澄江「最後の月に限って、店の窓が割れて。ガラス代も払って、残高、千二百円」

理佳「お父さんは？」

澄江「もう別れてた。関係ない」

理佳「あ、そっか」

澄江「思い出の話じゃなくてね。あと二着直せば三千六百円になる。まだ使えるのよ」

　奈緒は箸を置く。

奈緒「まだ使うつもりのものを、先に減らしてしまいました」

澄江「置けないのは分かったけど」

　理佳が卵焼きを一つ、澄江の弁当へ戻す。

理佳「これ、多い」

澄江「食べられない？」

理佳「あとで眠くなる。午後、一本返すから」

澄江、戻された卵を自分で食べる。

12　同・倉庫出入口　午後零時十分

航が出発前の指差し確認を終える。

奈緒は、机の上の段ボール板を整理している。

航「台、最後どこに置きます？」

奈緒「まだ。ごめん、長くなって」

航「午後の積み込み、間に合います」

航が黄色い扉の板を置く。

奈緒「私、今日、ずっと入りますって言おうとしてる」

航「はい」

奈緒「そこ、否定しないんだ」

航「台は、運べますよ。入口の寸法も取ってあるし、脚も外せる。でも中で使えるかは、僕にはまだ分からないです」

航は台の下げ札を見直す。

「持出不可」のままなのを確認する。

航「行ってきます」

奈緒「いってらっしゃい」

トラックのエンジン音。

奈緒は、手元の「確認済」の印を筆箱へ戻す。

13　同・事務机　午後零時二十五分

理佳がイヤホンを着け、パソコンに向かっている。

澄江は少し離れた席で、裁断台の査定案内を読んでいる。

奈緒が、書き直した一覧を持ってくる。

理佳、片耳だけ外す。

奈緒「急ぎません。お仕事、どうぞ」

理佳「あと五分です」

奈緒が立ち去りかける。

理佳「倉持さん」

奈緒「はい」

理佳「明日、私の荷物だけ止めること、できますか」

奈緒、足を止める。

理佳「今の部屋、今月いっぱいは使えるんです。家賃も払ってる」

奈緒「配車と契約を確認します。変更費用が出るかもしれません」

理佳「はい」
奈緒「止める手配まで、してよろしいですか」
理佳「まだ。できるか知りたいだけ」
　奈緒、手帳に「照会のみ」と書く。
理佳「台が入ったら、お母さんの仕事部屋にできるから」
奈緒「理佳様のお部屋を？」
理佳「その方が、使い道あるし」
　奈緒、一覧を裏返し、白紙の面を上にして机へ置く。
奈緒「それは、お母様に聞いてからにしませんか」
　理佳のパソコンに通話の通知。
理佳「さっきの相談室、借りていいですか」
奈緒「どうぞ。通れるように机は寄せてあります」
　理佳はパソコンを閉じ、鞄へ入れる。
　相談室へ移動し、扉を閉めてから通話に入る。
理佳「はい。……すみません、今、入ります」
　通話先への声。
　奈緒は事務机へ戻る。
　澄江が奈緒を見る。奈緒は新しい一覧を揃える。

14　同・休憩机　午後零時四十五分

　奈緒は中古家具店へ電話している。
　澄江が横で聞く。
奈緒「本日の査定は予定どおりで、売却は保留です。所有者の回答があるまで、搬出しない形で」
家具店の声「分かりました。ただ、今日の便に載せないと、次は来週です。値段も、そのときもう一度になります」
奈緒「今日の予定額は、八千円。変更の可能性ありですね」
家具店の声「そうです」
　奈緒が澄江を見る。澄江、うなずく。
　電話を切る。
澄江「八千円」
奈緒「売ると決めた値段ではありません」
澄江「分かってます。十二回払いしたのがねえ」
　澄江、笑おうとして、うまく笑えない。
澄江「私が全部やめれば、早いのよね」
奈緒「仕事を？」
澄江「家にいれば、ご飯も作れるし。理佳が頼む前に、取ってあげられるものもあるし」
奈緒「理佳様は、それを？」

澄江「頼まないの、あの子」

　澄江、紙の角をきっちり揃える。

澄江「一人でやれるようになるのに、ずいぶん練習したから。頼んだら負けだと思ってるんじゃないかしら」

　理佳、通話を終えて近づいてくる。

理佳「聞こえてるよ」

　澄江が顔を上げる。

理佳「別に、負けとか思ってない」

澄江「そういう意味じゃなくて」

理佳「電球、替えてって、この前頼んだじゃん」

澄江「あれは、私の方が近かったから」

理佳「近い人に頼んだ。頼めてるよ」

　理佳、机の前で止まる。

　奈緒は自分の書類だけを取り、二歩離れる。

15　同　午後一時

澄江「じゃあ、一緒に住まなくていいってこと？」

理佳「その話、今はしてない」

澄江「一人で困ってないんでしょ」

理佳「困ることはある。だけど、それを全部お母さんにやってもらうために、家、決めたんじゃない」

澄江「私は、その方が安心だから」

理佳「店、やめたら家賃きついって。だから半分ずつなら、仕事も減らせるって」

澄江「お金だけだったの？」

理佳「お金、大事でしょう」

　澄江、立つ。空の弁当箱を重ねる。

澄江「いい。台は売る」

理佳「そうやって終わらせないで」

澄江「どうしたらいいのよ。あれは駄目、ここは駄目って」

理佳「私が駄目って言ってるわけじゃない。そこで曲がれないんだって」

　澄江の手の中で、弁当箱の蓋がうまく重ならない。

澄江「分かってる」

理佳「分かってないよ。私の部屋の扉、毎回お母さんに閉めてもらうの？」

澄江「だから、台を売るって」

理佳「私のために仕事やめました、って家に、毎日帰るのも嫌だよ」

　澄江の手が止まる。

　理佳、息を吸う。言い直そうとして、言葉が出ない。

澄江「そんな言い方するつもり、ない」

理佳「言わなくても、私がそう思う」

事務所から、誰かの電話応対が聞こえる。

澄江は蓋を置く。今度は、無理に重ねない。

澄江「だったら、どうして一緒に住もうって言ったの」

理佳、答えられない。

16　同・床の新居　午後一時十五分

奈緒が青い線の中へ折り畳み椅子を一脚置く。

澄江は立ったまま。理佳は少し離れている。

奈緒「今、今日決めなくてはいけないことだけ、お伝えします」

二人が奈緒を見る。

奈緒「明日の便に何を積むか。それと、今日の台の売却を断るか。台をこの先ずっと残すかは、今日、決めなくても預かれます」

澄江「預かるって、いくら」

奈緒「所長に確認します。無料ではありません」

理佳「私の便を止める方も、お願いします」

澄江、理佳を見る。

澄江「来ないの？」

理佳「まだ決めてない。金額を聞いてから、二人で決めたい」

奈緒、うなずく。

奈緒「十分ほどください」

奈緒が事務所へ行く。

澄江は、理佳の部屋を表す線の手前まで歩く。

澄江「ここ、日が入るの、午後だったね」

理佳「西だからね」

澄江「カーテン、厚いの買った？」

理佳「今の持ってく。寸法、少し長い」

澄江、言いかける。

理佳も、母を見ている。

澄江「……そう」

澄江は線をまたがず、椅子に戻る。

17　同・床の新居　午後一時二十五分

理佳は、部屋の中にいる位置のまま話す。

理佳「お母さんの台、私、なくなっても大丈夫だと思ってた」

澄江「うん」

理佳「機械だけあれば、同じことできると思ってた」

澄江「小さいものならできる。ズボンの丈くらいなら」

理佳「言ってくれたら」

澄江「言ったと思ってた」

　澄江の膝に布袋。開けた口から、ワンピースの裾がのぞいている。

澄江「私も、あんたの机、どこでも同じだと思ってた。パソコン、一つだし」

理佳「うん」

澄江「誰かいたら、しゃべれない仕事なんだね」

理佳「しゃべれる。でも、聞かれていい話ばっかりじゃない」

　澄江、うなずく。

理佳「一緒に住もうって言ったとき、家賃の計算はした。お母さんの店が終わるから、今しかないと思った。でも、自分がどうしたいかは、あんまり考えてなかった」

澄江「私は考えた。考えて、あんたが楽になるって言えば、断られないと思った」

　理佳の顔が上がる。

澄江「昼間に一人なのは、平気なの。やることあるから。夜、ご飯を作って、食べて、片づけて。そこだけ、飽きた」

理佳「……うん」

澄江「テレビつけるのも面倒な日が増えて。それを言うの、ちょっとね」

　澄江、裁断台の方を見る。

澄江「だからって、ずっと家にいろっていうことじゃない」

理佳「ずっとはいないよ」

澄江「分かってる」

理佳「晩ご飯も、毎日は一緒に食べない」

澄江「何日くらい？」

理佳「知らない。まだ暮らしてない」

　澄江、短く笑う。

澄江「そりゃそうだ」

　理佳も、少し笑う。

　笑いが収まっても、理佳は部屋の線の中にいる。

18　同・事務机　午後一時四十五分

　奈緒が、手書きの料金表を三人の中央へ置く。

　早瀬もいる。

奈緒「台を一か月預かる場合、取扱料三千三百円と保管料六千六百円。税込みで九千九百円です。今日ここに持ってきた分は、元の契約に含まれています」

早瀬「その間、ここを仕事場にはできません。お荷物としてのお預かりです」

澄江「借りに来て使うのは、駄目ってことね」

早瀬「はい」

奈緒「後日、新居に届け直すなら、この住所で八千八百円。一か月で届け直す場合の合計は一万八千七百円です。別の場所なら、運ぶ前に改めてお見積もりします」

理佳「そのまま延びたら？」

早瀬「次の一か月が六千六百円。更新は確認します。返事がないからといって、勝手に処分はしません」

　奈緒が二枚目を置く。

奈緒「理佳様の荷物を明日運ばない場合は、今の契約の変更が三千三百円。後日の便は、新たに見積もりです」

理佳「分かりました」

澄江「全部その場で出るのね」

早瀬「金額をぼかすと、後で困りますので」

　澄江、九千九百円を指で押さえる。

澄江「二着増えても、足りない」

理佳「増えた仕事のためだけに預けると、そうなるね」

　奈緒、二人の返答を待つ。

澄江「倉持さんなら、どうする？」

　奈緒はすぐに答えない。

奈緒「さっきまでなら、売る方を勧めていたと思います。台をなくせば、私の図面が使えるので」

　澄江、奈緒を見る。

奈緒「でも、まだ仕事に使うと聞きました。私には決められません。選んだ後の手配は、私がします」

　早瀬が椅子を引く。

早瀬「三時半まで使えます。台を動かすときは呼んでください」

19　同・床の新居　午後二時

　澄江は椅子、理佳は車椅子で、小さな食卓の段ボールを挟む。

　まだ何も載せられない、平たい食卓。

理佳「私は、明日、引っ越したい」

　澄江が顔を上げる。

理佳「今日、来ない方がいいって言われたら、そっちにしようと思ってた。でも、それもお母さんに決めてもらう話だった」

澄江「来てほしい」

理佳「私の部屋は、私の仕事部屋でもある。台を置くためには空けない」

澄江「うん」

理佳「お母さんの仕事も、私が終わりって決めない」

　澄江は鞄から帳面を出す。

　注文が数行。赤い線で納期が引いてある。

澄江「今、頼まれてる分は三着。これは手をつけたから仕上げる。裁断は終わってる」

理佳「さっきの二着は？」

澄江「一度、断る。どうしても私にっていうなら、待ってもらえるか聞く」

　澄江は帳面を閉じる。

澄江「台は、一か月だけ預けたい。売るって決めるには、今日、疲れた」

理佳「九千九百円」

澄江「私が払う」

理佳「分かった」

澄江「あっさりしてるね」

理佳「半分出すって言ったら、怒るかと思った」

澄江「怒らないけど、今回はいい」

　理佳、料金表を澄江の方へ寄せる。

理佳「一か月後、うちが広くなるわけじゃないよ」

澄江「そうね」

理佳「戻す場所が見つからなかったら？」

澄江「売るか、預け続けるか。また決める。でも何年も保管料を払うのは無理。店の最後の帳簿も締めて、続ける仕事の量も考える」

理佳「じゃあ、二週間後に、一回話そう。期限の日じゃなくて」

澄江「空いてる日、送って」

理佳「今決める？」

澄江「今、あんた、予定覚えてる？」

　理佳、笑い、スマートフォンを出す。

20　同・床の新居　午後二時二十分

　奈緒と早瀬が裁断台を青い線の外へ戻す。

　澄江が見ている。手伝おうとして、早瀬に目で制される。

　台が止まる。

　広くなった台所。

　奈緒は、小さな食卓の段ボールを元の位置に置こうとする。

理佳「もう一回、最初からいいですか」

奈緒「はい」

理佳「私、帰ってきます」

　理佳は玄関の位置へ移動する。

　奈緒は図面を閉じる。

理佳「ただいま」

　澄江は椅子に座ったまま返す。

澄江「おかえり」

　理佳が鞄を下ろそうとする。

置ける場所がない。

理佳「鞄置くところ、欲しい」

奈緒「今お使いの低い棚、ここに置くと？」

理佳が位置を示す。奈緒が棚の段ボールを動かす。

理佳は台所を通り、自分の部屋へ入る。

奈緒が扉の段ボール板を持つ。

今度は理佳が位置を変えられる。手を伸ばす位置も取れる。

理佳「ここなら。実物でも、明日やります」

奈緒「荷物を全部置く前に、確認しましょう」

理佳は部屋から出てくる。

理佳「お母さん、洗濯して」

澄江「え？」

理佳「試すの。洗濯物、持って歩いてみて」

澄江は空の洗濯かごを持つ。

台所から物干しへ向かう。

椅子の背とすれ違えず、かごを縦にする。

澄江「これ、洗濯物入ってたら落ちるわ」

奈緒、小さな食卓をずらす。

理佳が通り、澄江がかごを持って歩く。

二人が、同じ場所に来る。

澄江、思わず止まる。

理佳「先、どうぞ」

澄江「うん」

澄江が通る。理佳が続く。

奈緒は位置を測り直し、記入する。

21　同　午後二時四十分

澄江が布袋から小型のミシンの写真を出す。

奈緒はそれに合わせた段ボールを、小さな食卓の上に見立てて置く。

奈緒「こちらの食卓、丈夫さと高さは、ミシンを使う前に実物で確認してください。今日は、周りの場所を」

澄江「これは前に理佳の家で借りたから、縫える。振動よけもある」

理佳「でもご飯のとき、どこへ片づける？」

澄江は台所の収納を指す。理佳も同時に、そこを指す。

理佳「そこ、私の鍋」

澄江「鍋、そんなにある？」

理佳「お母さんも持ってくるから。二軒分」

二人、笑わない。現実の問題として考える。

澄江、持参した鍋の一覧を出す。

澄江「この大きいの、もう使わないかな」

理佳「まだ捨てないで。ミシンは、お母さんの部屋の棚、下の段は？」

澄江「糸が入る」

理佳「糸は上？」

澄江「上、届く」

奈緒が棚を表す段ボールに「下段・ミシン」と書く。

理佳「夕飯の直前に縫い始めるのは、やめてね」

澄江「何時が夕飯なの」

理佳「まだ決めてない」

澄江「じゃあ、それを先に言って」

理佳、スマートフォンの予定表を見せる。

理佳「遅い日は、ここに入れる。連絡なかったら七時半、どう？」

澄江「六時半に食べたい」

理佳「早い」

澄江「お腹すくもの」

奈緒、ペンを止める。

二人は顔を見合わせる。

理佳「じゃあ、先に食べてて」

澄江「毎日？」

理佳「早く終わった日は一緒に。休みの日は私が作る日も決めよう」

澄江「台所、散らかすでしょう」

理佳「私の今の家、見た？」

澄江「……片づいてた」

理佳「いつの私なの、それ」

澄江、声を出して笑う。

奈緒は、再びペンを動かす。

22　同・事務机　午後三時十分

書き直された搬入一覧と、一か月の保管申込書。

澄江は眼鏡を掛ける。

奈緒「先ほどの確認漏れで増えた、今日の配置確認の費用は頂きません。台の保管は別のご契約です」

澄江「はい」

奈緒「ここが料金。こちらが期間。更新前にはご連絡します。再配送は、届け先と日程が決まってからです」

澄江が読み、署名する。

理佳も自分の搬入一覧を読む。

理佳「これ、『机一台』。私の昇降机です。コード、外して別にすると、どこか行く」

奈緒「本体と一緒の袋で固定します。現場にも伝えます」

奈緒、書き足す。

澄江が一覧の一行を指す。

澄江「こっちは『食器棚』じゃない。糸とボタンの棚」

奈緒「用途も書いておきます」

奈緒は今度こそ二人に別々の紙を渡す。

奈緒「お名前のある方を、ご本人で。読み終わるまで待ちます」

澄江はゆっくり読む。理佳は先に読み終わり、携帯を出しかける。

澄江の眼鏡がずり落ちる。澄江が直す。

理佳は携帯をしまう。

奈緒も急かさない。

署名が終わる。

奈緒は澄江に目で確認してから、電話を掛ける。

奈緒「丸瀬運送の倉持です。本日の谷口様の裁断台ですが、今回は売却を見送ります。査定のご訪問も、取り消しをお願いします」

澄江は自分の控えを受け取り、鞄へしまう。

23　同・研修区画　午後三時二十五分

新居の床が剥がされていく。

奈緒は青いテープを巻き取り、理佳は通路の外から見ている。

早瀬は次の予約用の折り畳み机を運んでいる。

澄江が携帯で電話する。

澄江「谷口です。追加の二着、今月中はお受けできません。先に預かってる三着は、二十八日に。……ええ。はい、申し訳ないです」

相手の声は聞こえない。

澄江、黙って聞く。

澄江「そうですか。では、また機会がありましたら」

電話を切る。

理佳が見る。

澄江「別のところに頼むって」

理佳「うん」

澄江は帳面を出す。

追加の二着に、一本の線を引く。

強く引かない。文字は読める。

裁断台には新しい下げ札。「保管」。所有者の欄に「谷口澄江」。

澄江が台の端に手を載せる。

澄江「毛布、掛けてもらえます？」

奈緒「はい」

奈緒と早瀬が毛布を掛ける。

澄江は最後の角まで見届けて、手を離す。

24　新居・台所　翌日午後四時

本物の壁。本物の小さな食卓。

昨日の段ボールが示していた場所へ、低い棚が収まっている。

荷物の箱は通路の外にまとめてある。

航が、扉の前から最後の保護材を外す。

奈緒は確認票を持っている。

奈緒「理佳様、扉、お願いします」

理佳が自分の部屋へ入り、扉を閉める。

ラッチが、小さく鳴る。

奈緒も澄江も、その音を聞く。

少し経って扉が開く。

理佳「大丈夫」

奈緒、記入する。

澄江が流し台の下から鍋を出す。

隣の箱にも同じ大きさの鍋がある。

澄江「鍋、多い」

理佳「言ったよね」

航が笑いをこらえ、箱を畳む。

澄江「この大きいの、どうする？」

理佳「今日は、まだ決めない」

澄江「置くところ、ある？」

理佳が流し台の下をのぞく。

理佳「……それは決めよう」

澄江と理佳、鍋を重ねてみる。

一つの蓋だけ、ぴったり合わない。

25　新居・玄関　同日午後四時十分

作業終了。

航が先に外へ出る。奈緒が最後の確認票を渡す。

奈緒「台の保管のご連絡は、澄江様のお電話へ。ほかに気になることはありますか」

理佳「いまのところ」

澄江「すみません、昨日、長くなって」

奈緒「最初の一覧、私が間違えていましたから」

　　澄江、何か返そうとして、うなずくだけにする。

奈緒「では、失礼します」

　　奈緒が出ていく。

　　玄関のドアが閉まる。

　　澄江は、食卓に置いた布袋から長いカーテンを出す。

澄江「理佳。カーテン、今日やる？」

　　理佳は自分の部屋の前にいる。

理佳「今日、ちょっと休みたい」

澄江「分かった」

　　澄江がカーテンを袋へ戻しかける。

理佳「明日、お願いしていい？」

澄江「午前中は、預かってるの仕上げる。午後なら」

理佳「じゃあ、午後。代金は？」

澄江「丈、測ってから」

　　理佳が笑う。

理佳「了解」

　　理佳、自分の部屋へ入る。

　　澄江は食卓の上に残った糸くずを拾い、袋へしまう。

26　新居・理佳の部屋から台所　続き

　　理佳の手が扉を閉める。

　　最後の隙間で止まる。

理佳「お母さん」

澄江「何？」

理佳「今日、ご飯、六時半でいいよ」

澄江「おかず買ってくるだけよ」

理佳「うん。私の分も、お願い」

澄江「魚とお肉、どっち？」

理佳「魚」

澄江「私、お肉にしようと思ってた」

　　理佳、少し考える。

理佳「二種類、買えば」

　　澄江は財布を取りながら、うなずく。

澄江「そうね」

　　扉が閉まる。

　　澄江が買い物袋を広げる音。

　　部屋の中で、理佳が鞄のファスナーを開ける音。

　　別々の音が、同じ家から聞こえる。

終

制作記録と参考資料

提出内容

本作は、引っ越し前日に原寸大の家具配置を確かめる母娘と引越し担当者を描く、新規執筆の単発ドラマです。脚本は全 26 場、結末まで完成しています。想定尺は約 35〜40 分ですが、読み合わせによる実測値ではありません。

脚本全文は本書前半に収録し、編集用テキストも別途添付。本文の台詞、人物、事件、契約条件、結末は今回の依頼に対して書き起こしました。ユーザーの既存の小説・キャラクター・過去の成果物は使用していません。

制作時間

作業開始は 2026 年 10 月 13 日 00 時 45 分 34 秒（日本時間）。120 分の期限は同日 02 時 45 分 34 秒です。時刻は実際の作業記録によります。120 分は上限として扱い、時間を使い切るための待機は行っていません。

・00 時 45 分〜00 時 49 分　公開資料の検索、住宅・家具配置の資料確認、題材と中心状況の決定。

・00 時 49 分〜00 時 58 分　構成整理、前半と後半の執筆、全 26 場の初稿完成。

・00 時 58 分以降　完成稿を対象とする類似性再検索、整合性点検、修正、制作記録作成、納品ファイルの表示確認。

内容確定時刻と経過時間は、この記録の末尾に記載します。

企画

ジャンル　生活ドラマ／家族ドラマ。

一文企画　新居を倉庫の床に再現した母娘は、残したい裁断台が暮らしを塞ぐことを知り、互いのためだと思って決めた同居を、初めて自分の希望として選び直す。

主要な問い　家族の役に立ちたいという願いが、相手の選択を先回りするとき、何を確かめ直せばよいのか。

舞台の選択理由　家具の配置換えによって対立を画面にできる。扉を閉める、かごを持ってすれ違う、仕事道具をしまうという動作が、会話の裏付けになる。主要ロケーションは営業所と新居の二か所に限定した。

三人の変化

・奈緒　荷物を収めて確認印をもらうことを優先していた担当者が、本人確認の不足を認め、選択肢と費用を示して返答を待つ。

・澄江　娘を助けるという説明の奥にあった、自分が誰かと暮らしたい気持ちを言葉にする。仕事を全部捨てず、追加受注を断る損失も引き受ける。

・理佳　母を困らせないために引越しを取りやめようとする姿勢から、自分も同居したいことと、譲れない仕事・生活の条件を同時に伝える。

構成

第 1〜4 場　床の新居と裁断台を提示。担当者が本人の確認なしに台を搬入計画から外していたことが判明する。

第 5〜9 場　台を複数の位置へ動かす。通過、扉の開閉、食事、裁断という別々の動作が成立しないことを確認する。

第 10〜14 場　担当者の責任と作業時間の限界を示す。母には追加受注、娘には仕事の通話があり、二人とも働く人だと具体化する。娘は自分の引越しを止められるか照会する。

第 15〜17 場　「娘のために仕事をやめた家には帰りにくい」という言葉で衝突。互いが相手の希望を推測したまま同居を決めていたことが分かる。

第 18〜23 場　費用を比較し、同居実行と裁断台の一か月保管を本人たちが選ぶ。追加の二着は他店へ流れ、選択には現実の損失も残る。新しい配置は二人の動作で再確認する。

第 24〜26 場　翌日の新居で実物の扉が閉まる。母への頼みごとにも時間の相談が生まれ、夕食は好みの異なる二種類を買うことになる。

結末の扱い　裁断台の永久的な行き先は確定させていない。しかし、明日の引越しをどうするか、本人の同意なしに台を売るのか、同居のために誰かの仕事を無条件に諦めるのかという本編の争点には決着をつけた。将来の再検討は意図した余韻であり、脚本の未執筆部分ではない。

調査方法

一般公開されたウェブページと公的 PDF を検索・閲覧した。認証の回避、非公開資料の取得、有料作品の不正取得、著者や会社への連絡は行っていない。既存脚本本文の収集・書き換えも行っていない。

実務の下調べは国土交通省と家具メーカーの資料を軸にした。類似作品の確認は、放送局、映画祭、放送チャンネルなどが公開した作品概要を中心とする。検索結果に出た個人ブログや商品販売ページを、人物の実話や台詞の材料として使っていない。

参考資料

すべて 2026 年 10 月 13 日（日本時間）に閲覧。以下の番号を独自性確認にも使用する。引用文を脚本へ転記していない。

［1］国土交通省『地域で自立して居住することを目指して 障害者の居住にも対応した住宅の設計ハンドブック』2024 年 6 月。

https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/content/001751893.pdf

参照範囲：冊子 3〜5 頁、8〜10 頁を中心に、対象者・車椅子の大きさ・通路と出入口の扱いを確認した。個々の車椅子や動作によって条件が異なること、通れる幅だけでなく曲がる条件や扉の状態が関わることを参考にした。第 5〜7 場と第 20 場に反映。冊子の図面や数値基準をそのまま架空の新居に当てはめて安全を保証する描写にはしていない。

［2］カリモク家具『無料 3D インテリアシミュレーター』。

https://www.karimoku.co.jp/3d_simulator/

参照範囲：採寸した部屋への家具配置、通路確認、椅子を引いたときの空間。第 1 場と第 20〜21 場の動作確認の下調べ。登場する家具は同社製品の再現ではない。

［3］カンヌ国際映画祭『DOGVILLE』作品ページ。

https://www.festival-cannes.com/en/f/dogville/

用途：既存作の物語概要との比較。本文の翻訳や台詞は使用していない。

［4］Film Festival Cologne『Dogville』作品ページ。

https://filmfestival.cologne/en/filme/dogville

用途：床面の線で町を表す演出上の先例と、公開された作品概要の確認。

［5］朝日放送テレビ『京都のお引越し』公式ページ。

https://www.asahi.co.jp/ohikkoshi/

用途：引越し、家具、生活の選び直しという題材上の近接性の確認。

［6］日本映画専門チャンネル『お引越し 4K デジタルリマスター版』作品ページ。

https://www.nihon-eiga.com/program/detail/nh00027603.html

用途：引越しと家族関係を扱う既存映画の公開概要との比較。

［7］テレビ東京『引越し探偵サクラ』2024 年 3 月 22 日付の番組発表。

https://www.tv-tokyo.co.jp/information/202403/4402-amp.html

用途：引越しを題材にするドラマの近接作品調査。犯罪・暗号解読の筋を本作へ導入していない。

［8］朝日放送テレビ『日曜の夜ぐらいは…』公式ストーリー。

https://www.asahi.co.jp/drama_22_abctv/story/

用途：車椅子を使う家族との関係を描くドラマとの比較。母娘関係という広い共通性に加え、当事者の役割と物語の駆動力が異なるかを確認した。

独自性の確認結果

判定　参照した公開概要と検索で確認できた範囲では、本作の中心状況、人物の職業と関係、出来事の順序、解決方法が一体として一致する作品は確認できなかった。これは世界中の既存作品との非類似を証明するものではなく、法的な権利調査の完了を意味しない。

確認対象ごとの評価

『Dogville』［3・4］　床の線で建物の空間を可視化する外見上の共通点がある。この視覚手法そのものを本作独自とは主張しない。同作の公開概要にある逃亡者と共同体の搾取・報復に対し、本作は実在する倉庫内の家具検証を描く。線を引く・修正する・剥がす作業にも劇中の目的を持たせ、翌日は通常の実景へ移る。

『京都のお引越し』［5］　引越しや家具、生活を選ぶという一般的題材は近い。公開概要は京都を訪れた男性と従姉らとの交流を軸にする。本作は引越し前日の母娘と業務上の確認漏れを扱い、都市案内や職人との出会いを通じた移住の筋にはしていない。

『お引越し』［6］　家族と転居という一般的な共通点がある。同作の公開概要にある両親の別居に向き合う少女の成長に対し、本作は成人二人が同居の条件を選び直す話であり、人物配置と出来事の順序は異なる。

『引越し探偵サクラ』［7］　引越しという題材の確認対象。公開概要は新生活を始める主人公による謎解き。本作に暗号、探偵、事件解決の構成はない。

『日曜の夜ぐらいは…』［8］　車椅子を使う家族、生活上の制約、女性同士の関係という広い共通点がある。公開概要では母の介助を担う娘や女性たちの出会い、宝くじ、カフェ開業が展開を動かす。本作の理佳は既に一人暮らしをしている働く娘で、家具の検証と同居の合意を中心にした単発劇である。症状や障害の発生原因をドラマ上の衝撃として利用していない。

検索確認

・題名の完全一致検索「床の上の住所」を二つの検索系統で実施。確認した検索結果に同名の作品は見つからなかった。

・題材の組合せ「裁断台」「車椅子」「ドラマ」や「引っ越し 母 娘 車椅子」、演出要素「映画 ドラマ 間取り テープ 家族」を検索した。

・完成稿の特徴的な文言「私のために仕事やめました」「売るって決めるには」などを引用符付きで検索した。結果には語句の一部に反応した無関係なページが含まれ、台詞の一致を示す資料は確認できなかった。

・検索エンジンが完全一致指定を緩める場合や、検索対象外の作品があることを織り込んでいる。全台詞の網羅的な照合、専用データベースによる盗用検査、既存作品の全編視聴は実施していない。

本作で新規に設計した組合せ

本人の返答を取らず裁断台を外した搬入一覧／閉められない仕事部屋の扉／閉店と廃業を同一視した母娘のすれ違い／同居中止の照会／有料保管という期限付きの選択／追加受注を失う結果／本人別の確認票／実際の新居で閉まる扉、という因果関係を今回のために構成した。

自己点検と修正

時間と場面　初日の午前 9 時 10 分から午後 3 時 25 分まで、翌日の午後 4 時からの順で統一。小野は初日 12 時 10 分に次の仕事へ出発し、以後の重量物移動は所長が担当する。検証区画は 3 時半までに明け渡す。

所有と同意　裁断台は一貫して澄江の所有物。冒頭の預かりは査定のみ。搬入一覧の誤りと売却許可を混同しない。本人の署名後に査定訪問と売却を取り消す電話を加え、手配の終わりを明示した。

金額　保管初月は 3,300 円＋6,600 円＝9,900 円。新居への再配送を含める仮定では 9,900 円＋8,800 円＝18,700 円。再配送先や延長で額が変わることも明示。すべて架空の会社の劇中料金であり、相場や法定費用として示していない。

生活動作　裁断台は食卓として扱えない高さ・横木を持つ架空の家具。車椅子の直進だけで配置可と判定せず、曲がる、扉を閉める、物を取り出す動作を入れた。段ボールの扉には重量・操作感の再現限界を記載し、翌日の実物確認を残した。

仕事の継続　母がすべての仕事を即座に失う結末にせず、既に裁断済みの三着と、新規二着を分けた。倉庫を無料の仕事場にする解決は採用せず、保管中は使えないことを明記。ミシン作業と大型の裁断作業も分けた。

人物の主体性　理佳の障害を母の献身を称える道具にしない。娘の扉と母の仕事の両方に生活上の理由を置いた。スタッフが家族の結論を代行せず、澄江と理佳が費用を知った上で決める。

守秘の整合性　仕事部屋のプライバシーを求める理佳が倉庫の共用机で業務通話を続ける不整合を避け、通話時は空き相談室へ移るよう修正した。

台詞と行動　説明だけで解決したように見えないよう、食器の数、洗濯かご、棚の用途、夕食時間を実際に調整する場面を入れた。「同居すれば同じものを食べる」という小さな思い込みも最後にほどいた。

完成範囲と残る実制作作業

脚本本文、制作記録、参考資料、独自性の確認結果は提出対象として完成。未執筆の場面や仮の結末はない。

映像化時には、実際のセットと家具での動線検証、車椅子利用当事者と洋裁実務者による確認、俳優との読み合わせによる尺調整が必要になる。本作の資料調査は、そうした実地監修の代わりにはしていない。音楽・映像素材・実在商品の使用指定は設けていない。

内容確定記録

内容確定は 2026 年 10 月 13 日 01 時 07 分 53 秒（日本時間）。開始から 22 分 19 秒。脚本と制作記録の内容点検および全ページの一次表示確認を終え、最後の改ページ調整と納品用ファイルの保存に進んだ。120 分の上限内に結末まで完成した。